

メッセージアウトライン

創世記43:1～34「二度目のエジプト行き」

[1-2] 「さて、その地の飢饉は激しかった。彼らがエジプトから持って来た穀物を食べ尽くしたとき、父は彼らに言った。『また行って、われわれのために、食料を少し買って来てくれ。』」

カナンの地でも飢饉は相変わらず激しく、イスラエルの子どもたちがエジプトから買ってきていた食料はなくなってしまった。それで彼はもう一度エジプトへ行って食料を買ってくるように子どもたちに命じる。

[3-5] 「すると、ユダが父に言った。『あの方は私たちを厳しく戒めて、「おまえたちの弟と一緒にでなければ、私の顔を見てはならない」と言いました。もし弟を私たちと一緒に行かせてくださるなら、私たちは下って行って、お父さんのために食料を買ってきましょう。しかし、もし彼を行かせてくださらないなら、私たちは下って行きません。あの方は私たちに、「おまえたちの弟と一緒にでなければ、私の顔を見てはならない」と言ったのですから』」

再び食料を買いにエジプトへ行くためには末の弟ベニヤミンを連れて行かなければならぬ。それがエジプトのあの方（ファラオに次ぐエジプト第二の権力者）の厳しい警告であり、条件であった。そのことをユダは父に語る。これはすでに一回目に食料を買いにエジプトへ行って帰って来た時に父に告げていたことであった。(42:34) しかし、父はベニヤミンにわざわいが降りかかるのを恐れてそれを拒否していた。(42:38)

[6] 「イスラエルは言った。『なぜ、おまえたちは、自分たちにもう一人の弟がいるとその方に言って、私を苦しめるようなことをしたのか。』」

ベニヤミンもこの頃は三十歳を超えていたであろう。これはもう愛する妻ラケルの子であったとしてもこの年齢の子に対しては行き過ぎであり執着であり、偏愛と言わなければならぬ。

[7] イスラエルの子どもたちは、そのような家族のことなどをあの方に問われるとは予想もせず、問われるままに答えてしまったと弁明する。

[8-10] 「ユダは父イスラエルに言った。『あの子を私と一緒に行かせてください。私たちは行きます。そうすれば私たちは、お父さんも私たちの子どもたちも、生き延びて、死なずにすむでしょう。』」(8) ユダは強い決意をもって 父に訴える。それはこの飢餓の中で一族が生きながらえるためであり、さらに父の偏愛の悪癖を取り除こうとの思いもあったからかもしれない。

「私自身があの子の保証人となります。私が責任を負います。……」(9) ユダは自分の命をかけてベニヤミンを連れ帰ることを約束する。「ためらっていなかつたなら、今までに二度は、行って帰れたはずです」とも付け加える。(10)

[11-12] 「父イスラエルは彼らに言った。『それなら、こうしなさい。この地の名産を袋に入れ、それを贈り物として、その方のところへ下って行きなさい。乳香と蜜を少々、樹膠と没薬、ピスタチオとアーモンド、また二倍の銀を持って行きなさい。おまえたちの袋の口に返されていた銀も、持って行って返しなさい。おそらく、あれは間違いだったのだろう。』」

ユダの固い決意と自己犠牲の精神の前にイスラエルのかたくなな思いも変えられ、エジプト行きに同意する。カナンの地の名産物と最初に行った時の代価の二倍の銀と袋の口に返されていた銀も持っていくことも付け加える。これは彼らが正直な人間であることを示す。

[13-14] 「そして弟を連れて、さあ、その方のところへ出かけて行きなさい。全能の神が、その方の前でおまえたちをあわれんくださるように。、そしてもう一人の兄弟とベニヤミンをおまえたちに渡してくださるように。私も、息子を失うときには失うのだ」

「もう一人の兄弟」とは人質として牢に監禁されているシメオンのこと。→42:1 9,24

これは先行きを悲観してやけくそで言っているのではなく、彼を今まで守り導いてくださった全能の神の祝福を願いつつ、すべてをゆだねてこれから物事の展開を見守ろうという姿勢である。

[15-17] イスラエルの息子たちの一行はカナンの地からベニヤミンを伴って出發し、エジプトに下り、ヨセフの前に立った。ベニヤミンの到来はヨセフが待ち望んでいたことである。そしてそれは兄たちの発言が嘘ではなかったことの証明でもあった。ヨセフは彼の家を管理する者に彼らを家に連れて行き、昼食の準備をするようにと命じる。ヨセフも昼に帰って彼らと食事をするためである。

[18] 「一同はヨセフの家に連れて行かれたので、怖くなって言った。『われわれが連れて来られたのは、この前のとき、われわれの袋に戻されていた、あの銀のせいだ。われわれを陥れて襲い、奴隸としてろばとともに捕えるためだ』」

兄たちは全く予期しない厚遇を受けることによって疑惑と不安が生じた。彼らは最悪の事態さえ覚悟する。

[19-22] 彼らは自分たちにかかっていると思われる疑いから逃れようと懸命に釈明をする。

[23-24] ヨセフは彼の家の管理者にあらかじめ十分な指示を与えていたと思われる。困惑し、狼狽している者たちへの彼の応対は、実に行き届いたものであった。そして牢に監禁されていたシメオンも連れて来られた。彼はまた砂漠の長旅をしてきたヨセフの兄弟たちに足を洗うための水を与え、彼らのろばには餌を与えた。

[25-26] 「兄弟たちはヨセフが昼に帰って来るまでに、贈り物を用意しておいた。自分たちがそこで食事をすることになっていると聞いたからである。ヨセフが家

に帰って来たとき、彼らはその家まで携えてきた贈り物を彼に差し出し、地に伏して彼を拝した」

ヨセフを拝するという行為は28節にも記されている、これはヨセフの夢が成就したことを読者によく示すためであろう。42:6も同様。→37:5~8

[27-28]「ヨセフは彼らの安否を尋ねた。『以前に話していた、おまえたちの年老いた父親は元気か。まだ生きているのか。』彼らは答えた。『あなた様のしもべ、私たちの父は元気で、まだ生きております。』そして、彼らはひざまずいて彼を拝した」

すでにベニヤミンの同行を確認している(16)ヨセフの一番気にかかるのは当然父のことである。兄弟たちの安否を尋ねた後に、彼は父についてさりげなく聞く。

[29]「ヨセフは目を上げ、同じ母の子であるベニヤミンを見て言った。『これが、おまえたちが私に話した末の弟か。』そして言った。『わが子よ、神がおまえを恵まれるように。』」

ベニヤミンを見て言ったヨセフのことばに兄弟たちは驚いたことであろう。しかし「わが子」と言ったのは年齢の差のゆえではなく、改めて目の前に弟を見る感動と、これまでの応対の関係を維持するためである。「神がおまえを恵まれるように」ヨセフは兄弟たちの返事を待たずにベニヤミンを祝福している。

[30]「ヨセフは弟なつかしさに、胸が熱くなつて泣きたくなり、急いで奥の部屋に入って、そこで泣いた」

ヨセフはベニヤミンを見ると喜びと懐かしさから、思わず声をかけたい思いに駆られて胸がいっぱいになつたのであろう。しかし、エジプト第二の権力者として取り乱すわけにはいかない。彼は急いで奥の部屋に入ってそこで泣いた。

[31-32]「やがて、彼は顔を洗つて出て来た。そして自分を制して、『食事を出せ』と命じた。それで、ヨセフにはヨセフ用に、彼らには彼ら用に、ヨセフとともに食事をするエジプト人にはその人たち用に、それぞれ別々に食事が出された。エジプト人は、ヘブル人とはともに食事ができなかつたからである。それは、エジプト人が忌み嫌うことであった」

エジプト人が外国人と一緒に食事をしないというのは社会的な理由というより宗教的な理由であり、外国人は食物を汚すということになつてゐた。ヨセフもヘブル人であるということはファラオや王家の者は知つてゐたが、彼がエジプト第二の地位にある者であったから適用されなかつたのであろう。

[33-34]「彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座られたので、一同は互いに驚きあつた。また、ヨセフの食卓から彼らの分が与えられたが、ベニヤミンの分は、ほかの者より五倍も多かつた。彼らはヨセフとともに酒を飲み、酔い心地になった」

兄弟たちが年齢の順に座らされたのは、あらかじめヨセフの指示が仕える者た

ちに伝えられていたからであろう。しかし、それを知らないヨセフの兄弟たちはヨセフに神的な能力を感じたであろう。彼らは度重なる不思議に驚きつつ、そこに神の働きの御手を感じ始めたのではないか。

ベニヤミンの分はほかの者より五倍も多かったというのは、五という数字はエジプトでは良い意味を持つ数字で、五倍も与えられたというのは一種の名誉のしるしであった。彼らはヨセフとともに食事を楽しんだ。兄弟たちはここにきてようやく不安もぬぐわれ、食事を楽しめるようになった。しかもエジプト第二の権力者の私邸に招かれ、その方とともに食事をする栄誉にあずかっている。

打ち続く飢饉、イスラエルのベニヤミンへの偏愛、父に対するユダの命がけのとりなし、イスラエルの決断、二度目のエジプト行き、ヨセフとベニヤミンとの再会、ヨセフの私邸での豪華な食事のもてなし。時の経過とともに様々な物事が進んでいくがその背後に神のご計画がある。

かつては憎しみのあまり、ヨセフを捕え、エジプトに売り飛ばし、父をだまし、悲嘆にくれさせ、後ろめたい思いを持ち続けてきた兄弟たちはここにきて自分の命をかけても弟ベニヤミンの帰還の保証をする者となり、ついにかたくなな父も折れ、家族の思いが一つとなり、二度目のエジプト行きが実現した。

神は良いことも悪いこともすべて摂理のうちに導かれ、それらを相働かされて、ご自身のご計画を実現に至らされる。イスラエルへのそして全世界への神の救いのご計画はこのようにして進んでいく。やがてこのイスラエル民族、しかも命がけのとりなしをしたユダの家系から救い主イエス・キリストがこの世に来られることになる。彼らにとってそれは将来のことであったが、現在の私たちから見れば二千年前のことになる。神のご計画は時至って必ずなる。私たちの人生においてもさまざまなことが起こって来るが、すべてを相働かせて益とされる全能の主なる神の御手に委ねて信仰者としての日々の歩みを進めていくことが大切である。→ローマ8：28